



中国雲南省大理・洱海

湖の汚染を防ぐ 少数民族の誇り

世界銀行タスク・チーム・リーダー 鎌田卓也

WATCH FIRE

【開発途上国の明日】



寺

の後方にうつすらと水面が見えるが、それは中国雲南省の古都大理市にある洱海^{アルハイ}という湖だ。当地は風光明媚な秘境として知られ、日本から観光客も訪れる。

湖の環境保護は難しい。中国では河川湖沼のすさまじい汚染に対応すべく、現在全土で污水处理場の建設ラッシュが起きているが、措置が後手に回り水質が下水並みに悪化した湖の例は枚挙にいとまがない。

そんな中、洱海では総合的な保護計画を実施し、藻の異常発生などの危機を乗り越えてきた。湖の過剰養が感知されると、いち早く国連の政策指導を取り入れ、汚染源の工場や養殖漁業池の移転、家畜尿の投棄規制など着々と手を打ってきた。まだ予断は許されないが、今のところ努力の甲斐あって湖の周遊観光船も人気を博しているようだ。

この成功のカギは、大理市を一手に管轄している少数民族の白族にある。白族は大理の景勝を賞して「風花雪月」と言うが、この月は「洱海に映る月」であり、洱海を自族の出の源、いわば母なる湖として民族の誇りとしている。そのため洱海を守るとなれば、住民、企業、行政が一丸となって保護に取り組む土壌ができていくわけだ。

環境という「公共の財」を守る。そんな仕事の原点を考えさせられる風景だ。(写真はYoonhee Kim) ㊞